

# 形状弁別課題遂行による後側頭部のヘモグロビン濃度変化(日本基礎心理学会第24回大会, 大会発表要旨)

著者	前原 吾朗, 田谷 修一郎, 小島 治幸
雑誌名	基礎心理学研究
巻	24
号	2
ページ	233-233
発行年	2006-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7221">http://hdl.handle.net/2297/7221</a>

## 2P21

### 形状弁別課題遂行による後側頭部のヘモグロビン濃度変化

前原吾朗、田谷修一郎、小島治幸（金沢大学）

近赤外分光分析を用いて、形状の弁別によって後側頭部のヘモグロビン濃度  
が変化するかを検討した。観察者2名は、形状弁別課題と位置弁別課題を行  
った。形状弁別課題では、無意味な線画を記憶し、その後に連続して呈示され  
る線画が記憶した線画と同じであるかどうかを判断した。位置弁別課題では、  
線分の位置を記憶し、その後に連続して呈示される線分が記憶した線分よりも  
上にあるかどうかを判断した。形状弁別課題と位置弁別課題は、間に休憩を挟  
んで交互に6回ずつ行われた。1回の課題と休憩にかかる時間はそれぞれ1分  
間であった。ヘモグロビン濃度を課題間で比較したところ、複数のチャンネル  
で有意な差があった。後側頭部において刺激の形状に関する処理が行われたた  
めに、形状弁別課題遂行中に酸化ヘモグロビン濃度は増加し、脱酸化ヘモグロ  
ビン濃度は減少したと考えられる。視覚失認などの診断に近赤外分光分析が役  
立つ可能性があるといえるだろう。